

重点取組分野	令和 4 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
個に応じた指導・授業改善	①教師間で様々な手立てとツールを共有し、実践する中で、誰もが多様な表現方法から自分に合った手段を選び、伝え合える授業環境を整える。②教師が個に応じた合理的配慮を整理し、共有することで、子どもが自ら動いて理解を深めたり、できることを増やしていきたりし、一人一人が手応えを感じる授業を実現する。	①一人ひとりの状況に応じて、複数のワークシートを用意したり、iPadを適切に活用したりして支援した。子どもたちが様々な表現方法で表現することができた。②様々な合理的配慮をしている一方で、教師間の共有では不十分なところもあった。今後は、子どもが子どもの話を聞くことを重視し、一人ひとりが手応えを感じる授業を実現していきたい。	B
人権教育	①誰もが自分らしさを発揮したり、自他を理解し合えたりする機会を通して、安心して学校生活が送れるようにする。②様々な教科で、人(まちな人、友達)との関わりを大切に、日枝のまちの一員であることをより一層自覚する。③様々な環境で育つ児童一人ひとりの道徳観を育てるため教師の研修・研究時間を設定する。	①人権に関する職員同士の対話の機会を設けたことで、学級経営など自身の働き方に人権的な視点が深まり、それを児童に還元できた。②生活総合の時間を中心に、身近な材や地域の材とのかかわりを通して、日枝のまちの一員であることを自覚していった。③ミニ研修会など各部会発足の研修を自主的に行うことで、多様な環境で育つ児童の道徳観を育てることができた。	A
健康教育 食育	①体力・食育・健康の観点から児童にアプローチをし、生活習慣の改善を図る。②学校保健委員会を開き、健康に関する意識が高まるようにする。③食べ物に興味をもったり、食べることを楽しんだりできるように給食週間の取り組みや、お話しレストランを継続して行う。	①体育館の休み時間利用を開始したり、スポーツ委員の企画する集会に参加することで、外で遊ぶ児童が増えた。②心の健康に関して取り組み、年度自分たちの言動や行動を振り返り生活に生かすことができた。次年度は家庭との連携も企画していきたい。③給食委員の取り組みや、司書教諭の連携により、給食を楽しみにしている児童が増え、残量も減った。	B
ESD/SDGs	①月の目標にSDGsを紐づけ、社会について認知する機会を設ける。②教師の共有を進めるアプリケーションの開発及び実践。③図書と食育に関連したお話しレストランでSDGsについて取り上げる。	①月の目標にSDGsを関連させることはできなかったが、給食の献立にSDGsの17の視点を入れることができた。②アプリケーションで教師の共有をすることにより、日々の生活での教師同士の会話が大切だと実感した。書類や教材の共有(ペーパーレス→SDGs)はICT部会が中心となり行っていた。③お話しレストランは継続して行うことができた。	B
いじめへの対応	①いじめを早期発見するために、常日頃から児童の様子を見取り、変化があった場合には積極的にアプローチする。②児童に関する情報共有を職員間で密にし、多角的にいじめをとらえられるようにする。③問題が起きた際には、担任だけではなく、学年やブロック、チームで対応できるように、校内体制を整備する。	①日常の見回りや教員、児童への声掛けをこまめに行い、変化の有無をみとるようにした。②毎月の児童共有の時間に情報を集めたり、いじめ防止対策委員会を中心に、いじめのとらえに対するアンテナを高めたりした。③事実判明時には関係職員への連絡を迅速に行い、学年やブロックでのフォローができた。	A
人材育成・組織運営(働き方)	①生き生き日枝っ子研究会の各部会ごとにリーダーとファシリテーターを立て、キャリアステージに応じ、全員学校運営参加型の学校経営を行うとともに、職務や会議等を構成し直し、子どものための時間を確保する。②メンターチームでは、講師を招聘し、自発的に研修計画を立てて運営できるようにする。	①リーダーの見通しの下、ファシリテーターが部員の意見を上手に引き出したことで、全職員が意欲をもって学校運営に携わることができた。休憩時間も確保できるように、会議内容の精選やタイムマネジメントを意識した。②メンターチームを中心に積極的に授業を見合い、力を高めることができた。	B
特別支援教育	①誰一人取り残さない教育のために、一人ひとりを多面的かつ深く見取すことを通し、個に適した支援を目指す。また、特別支援はグラデーション化していき、誰もが受けられる一般的な支援だという認識を共有する。②子どもがもつ文化や言葉を尊重し、在籍級の学びがより「分かる」ように、一人ひとりにあった言語支援や教科支援を行う。	①子どもたちの研究を進める中で、教師が抱える困り感や悩みを共有し合ったことで教師の安心感が芽生え、子どもの安心感にもつながる活動ができた。②部会で学んだことを発信共有したいと思いつつも、どのように言語化するのが良いか悩み、共有できない場面があった。	B
児童生徒指導	①児童の気持ちに寄り添い、その思いを受け止めながら、児童一人ひとりに合った児童支援を積極的に進める。②児童支援体制の充実を図るため、SSWやスクールカウンセラーなどの専門家、区役所や児童相談所等の他機関と連携したチームアプローチの体制を整備する。	①一方的な指導ではなく、児童の思いを聞きながら、その子に合わせた支援を行えるように、打合せ等で支援の仕方や寄り添い方などの共有を行った。②関係機関だけでなく、SSWやカウンセラーともケース会議を行い、家庭に対し多角的にアプローチできるようにした。	B
地域活動/協働活動	①生活・総合を中心に、地域と継続してかかわれるようにする。②日枝っ子友の会と連携し、保護者、地域が主体的に子どもにかかわれる場づくりをする。③生き生き日枝っ子研究会を核とした学校運営のもと、学校運営協議会を中心に、学援隊などの組織を再編し、地域との連携を図る。	①地域の企業や幼稚園など、生活・総合を通して多くの地域人材とかがわかれた。年度をまたいで継続的にかかわることが課題である。②日枝っ子友の会と協働してイベント開催を行った。③学援隊の登録者は少しずつ増えている。さらに気軽にかがわってもらえるような連携の仕方を工夫していきたい。	B
情報教育/GIGAスクール構想	①学年に応じた基本的な操作スキルを習得できるようにするために、教職員が系統性を意識して指導する。②受信・発信の両者の立場から情報を正しく扱えるよう、メディアリテラシーの向上を目指す。③①・②を高める。一つの学習道具として、効果的にICTを活用できるようにする。	①教職員・子どもともに活用が進み、各学年の実態を把握できた。系統性の整理までは至らなかった。②外部講師による情報モラル教室を児童、保護者対象で実施できた。必要に応じて、メディアリテラシーに関わる指導が行われた。③教職員のミニ勉強会を定期的に行った。活用事例や悩み等を共有し、さらなる活用や改善に生かした。	A
ブロック内評価後の気づき	感染症が落ち着きつつある中、少しずつ活動を戻すことができたことで、小中が連携することの大切さを実感した。小中で授業を見合うことで、教材に対する考えや、評価に対する考えなど、ブロックで考えていく部分が多く見えてきた。中学生とかかわる機会があると、6年生の進学への不安も和らいだように感じる。ブロック内の学習財産を掘り・共有するというテーマを立てたことで、授業研究会で学校にある材を再確認できた。今後、さらに共有を広げ、同じまちに暮らす子どもたちを育てているという意識を高めることにもつながりたい。		
学校関係者評価	学習発表会を参観できたことはよかった。低学年からICT機器を活用していて驚いた。コロナ禍だからその成果ではあるが、半面、子どもの声が小さいと感じることもあった。生活・総合の学習では、「聞いてほしい」「知ってほしい」という思いが大事である。その思いを大切にしたい。子どもたちは保護者の方を向いて話していたが、保護者も、自分の子どもでなくてもきちんと聞いてよかった。以前は地域の方がかがわってくださり、豊かな経験ができた。今後も続けてほしい。特別支援教室での支援はどうなっているのか。地域ボランティアが入っているが、今後も継続できるように声をかけてほしい。		

中期取組目標振り返り	「生き生き日枝っ子」を目標に、子どもも教職員も、学校教育目標を意識して学校生活を進めてきた。今年度から、中期学校経営方針について、全職員で目標作成、振り返りを行った。そのため、目標を意識しながら、それぞれの部会でカリキュラムを考えることができたことは成果である。一部の部会に取組が偏っている部分があったので、来年度はそれを整理し、教職員一人ひとりが意欲をもって企画・実行し、達成感のある学校運営を行いたい。学校運営協議会を再開し、多くの示唆を頂いた。学校運営協議会や日枝っ子友の会を中心に、地域連携をさらに教職員全体で進め、子どもたちの学習環境を整えていきたい。
------------	---

重点取組分野	令和 5 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
個に応じた指導・授業改善	①生活・総合を核としながら、一人一人が生き生きと学ぶための支援の手だての共有を進める。まちを歩いたり、情報交換したりし、子どもが生き生きできる教材開発を、全職員で行う。②子ども同士が互いの話を聞きたいと思えるような関係づくりや、活動の充実、学習課題設定をし、解決していけるようにする。		
人権教育	①SDGs・特別支援部会の中で、教職員同士が対話をする機会を設ける。さらに全職員に広げられるようにする。②校内の授業研究事後研など、子どもの見取りを話す機会、様々な環境で育つ児童一人ひとりの道徳観を育てる視点をもって参加し、対話する。		
健康教育 食育	①スポーツ委員会の取組を継続的にを行い、外で体を動かす機会を増やしていく。②心の健康について、学校で行っている取り組みが家庭に伝わるような活動を行う。③給食で取り組んだ内容が保護者にも伝わるようなカードの工夫を行う。		
ESD/SDGs	①お話しレストランの活動など、職員が入れ替わっても継続できるよう、引継ぎをしっかりと行う。②教職員同士や子どもと教職員などが対話をする機会を定期的に設け、児童も教師もたれ一人取り残さない環境や雰囲気づくりを行う。		
いじめへの対応	①専任だけでなく、特別支援教育コーディネーターを中心に、多くの職員で教室を見合うようにする。②いじめ対策委員会で確認した事項について、必要に応じて全職員で共有し、事案に対するアンテナを高めるようにする。③事案発生時の初期対応後、早めに職員に伝え、全校で対応できるようにする。		
人材育成・組織運営(働き方)	①ファシリテーターを増やし、対話による課題解決を図ることで、自分が学校を創っていくという意識を高めていくようにする。②会議の精選や、研修を選択制にすることで、時間の使い方に幅のある放課後の時間を設定する。③メンターチームに、中堅層が必要に応じて加わり、研修の質を高めるようにする。		
特別支援教育	①教室でやりたい活動を職員で体感して、大人も安心して和やかな雰囲気でも過ごせるようにしたり、子どもにも還元したりする。②コーディネーターを中心に、「見せる」「知らせる」「伝える」をキーワードに、職員同士の対話を密にし、児童支援の引き出しを増やす。獲得した支援を試し、情報を発信する。		
児童生徒指導	①低中高、個別支援学級に配置したコーディネーターを中心に、児童への対応の仕方について、学年で相談して取り組むようにする。②関係機関との連携について、専任だけでなく、学年とも、ケース会議や保護者対応などで積極的にかがわられるようにする。		
地域活動/協働活動	①学級づくりに地域や保護者が継続してかかわれるよう、生活・総合の材や教育課程などを参考にして、各学年へかがわり方を伝えていく。②日枝っ子友の会との窓口を、学級づくり部会にし、多くの職員でイベント企画などにかかわれるように、風通しを良くする。③地域コーディネーターとのかかわりを増やす。		
情報教育/GIGAスクール構想	①基本スキルの系統性については、今年度の実態把握を生かし、整理・周知していく。②メディアリテラシーの向上については、来年度も外部講師による指導等を視野に入れ、日常的に指導できるようにする。指導内容を整理・共有し、全校的に指導していく仕組み作りを行う。ミニ勉強会も継続していく。		
ブロック内評価後の気づき			
学校関係者評価			

中期取組目標振り返り	
------------	--

重点取組分野	令和 6 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
個に応じた指導・授業改善	c1		
人権教育	c2		
健康教育 食育	c3		
ESD/SDGs	c4		
いじめへの対応	c5		
人材育成・組織運営(働き方)	c6		
特別支援教育	c7		
児童生徒指導	c8		
地域活動/協働活動	c9		
情報教育/GIGAスクール構想	c10		
ブロック内評価後の気づき			
学校関係者評価			

中期取組目標振り返り	
------------	--